

本書の特徴および使い方



われわれは、生命科学分野の論文で使われる用語を調査する目的で、この分野の主要学術雑誌 89 誌に 2000 年～2004 年までの間に掲載された英語論文のうち、アメリカとイギリスから発表された論文の抄録を収集してコーパス解析を行った。構築された抄録データベース（約 15 万抄録：約 3,000 万語）に含まれる単語の種類は総計 20 万語にもなったが、3,000 万語のうちの 70%（約 2,100 万語）は 3,000 回以上登場する高頻出単語（語形変化による重複を含む約 1,300 語）によって占められていた。本書では、このような論文で高頻度に使われる動詞・名詞・形容詞・副詞・接続詞など、論文を書くために重要な単語や使い分けに注意すべき単語を約 1,000 語選び、それらの意味による分類と用法の解説を行った。これら 1,000 語の基本単語に自分の専門分野の用語（主に名詞）を加えるだけで、論文のほとんどの部分を執筆できるであろう。

◆ 本書の特徴

本書には次のような特徴がある。

- 英語論文抄録で高頻度に用いられる単語を、品詞と意味や使われる状況によって分類した
- 収集したすべての単語にその用例数（3,000 万語のデータベース中での出現回数）を示した
- ある単語の前後にどのような単語が高頻度で用いられるかという共起表現について、その用例数とともに表示した
- PubMed 論文抄録から典型的な例文を引用し、それを日本語訳とともに示した

本書は、動詞編、名詞編、形容詞編、副詞編、接続詞・接続語編の 5 つのパートから構成されており、それぞれ論文を書くために重要な単語〔動詞 405 語、名詞 272 語、形容詞 153 語、副詞 151 語、接続語（熟語）79 語〕が、使われる状況と意味によって分類されている。意味による分類は、動詞 86 分類、名詞 66 分類、形容詞 40 分類、副詞 34 分類、接続語 14 分類に分けられている。詳しくは、この後の単語分類リストを参照していただきたい。各分類項目は、図に示すような構成になっている。

◆ 本書の構成

1 分類項目

品詞や意味による分類。検索に便利なよう、【】内に代表的な単語

図 ● 本書の構成

1 分類項目

知る [know]

知る	認める	理解する
know	appreciate	understand
learn	accept	

◆ know は、受動態で「知られている」という意味に用いられることが多い。
◆ learn は「学習する」という意味だが、受動態の意味にも使われる。
◆ own about は否定的文で、learned about... が多い。
◆ know that は肯定文で、know whether は否定文で使われることが多い。
◆ appreciate は「真摯に認める/理解する」、accept は「受け入れる」という意味で用いられる。
◆ little is understood about... 「(メカニズムなどを) 理解する」という意味だが、引用がかなり多い。

2 見出し語リスト

◆ know は、受動態で「知られている」という意味に用いられることが多い。
◆ learn は「学習する」という意味だが、受動態の意味にも使われる。
◆ own about は否定的文で、learned about... が多い。
◆ know that は肯定文で、know whether は否定文で使われることが多い。
◆ appreciate は「真摯に認める/理解する」、accept は「受け入れる」という意味で用いられる。
◆ little is understood about... 「(メカニズムなどを) 理解する」という意味だが、引用がかなり多い。

3 頻度分析表

単語	用例数	品詞	用例数
know	12,705	① (be) known to	4,189
		② little is known about	1,696
		③ it is not known whether	228
		④ it is known that	164
learn	678	① (be) learned about	42
appreciate	196	① than previously appreciated	29
		② (be) appreciated that	17
accept	945	① (be) accepted that	107
understand	6,542	① to understand	1,934
		② (be) poorly understood	1,662
		③ little is understood about	31

4 共起・頻度分析表

共起・頻度分析	直後の単語 (数字: 用例数)						
直前の単語	to	about	that	whether	how		
be known	17,443	4,189	2,204	280	270	83	
61 know (s)	197	3	18	13	14	13	
5 learned	369	30	42	6	0	1	
193 learn (s)	309	36	27	4	10	19	
0 appreciated	173	3	0	17	1	0	
13 appreciate (s)	19	0	0	1	0	3	
5 accepted	628	13	0	107	0	0	
78 accept (s)	192	0	0	1	0	0	
216 understood	3,715	12	48	8	5	30	
1,934 understand (s)	2,827	2	0	5	9	359	

◆ know は、受動態で to 不定詞または about を伴う用例が多い。また、that 語、whether 節を伴う用例もかなり多い。
◆ learn は、受動態で about を伴う用例が多い。また、受動態で to 不定詞を伴う用例も多い。
◆ appreciate, accept は、受動態で that 節を伴う用例が多い。
◆ understand は、「to understand how...」で about を伴う用例も多い。

5 見出し語

◆ know (～を知る)
動詞、受動態の用例が非常に多い。

6 共起表現

◆ know to ～ (～すると知られている)
Gadsdén is known to be involved in a G2 checkpoint and may be involved in the normal progression from G2 to M phase with S phase events. (Cheng, 2002: 276228)
◆ Gadsdén is G2 チェックポイントに関するものと知られている。

7 例文

◆ little is known about ～ (～についてはほとんど知られていない)
However, little is known about the spatial distribution of this phospholipid in neurons and its dynamics. (J Cell Biol, 2001: 154255)
◆ しかし、～にわたるそのリン脂質の空間的分布についてはほとんど知られていない。

◆ it is not known whether ～ (～かどうかは知られていない)
Whether, it is not known whether such mechanisms are operative in vivo. (Proc Natl Acad Sci USA, 2001: 981286)
◆ しかし、～かどうかは知られていない。

語も掲載。

2 見出し語リスト

取り上げた類語とその日本語訳を一覧表にした。必要に応じて類語の**使い分け**の説明も加えてある。

3 頻度分析表

見出し語の用例数^{*1}を表にして示した。また、どのような単語が使われるかという共起表現の用例数^{*2}も合わせて明記した。

4 共起・頻度分析表

見出し語の直前／直後にくる主な単語と、その用例数をまとめた。必要に応じ、どのような単語とセットで使われやすいかという**解説**も加えた。

5 見出し語

重要度を★の数（0～2つ）で示した。

6 共起表現

代表的な共起表現をあげた。

7 例文

PubMed 論文抄録から典型的な生の論文を引用。論文執筆時に参考となる英文が満載である。なお、ゴシック体は下記の**日本語訳**（部分訳）に対応。

❖ 本書の使い方

本書では、見出し語の順番をアルファベット順にはせず、意味による分類を行った。これによって、類義語の中から書きたい内容によくマッチする単語を簡単に見つけられるよう工夫してある。

※1：3,000万語のデータベース中での出現回数を示す。本書の大きな特徴の1つである。

※2：見出し語の出現頻度には、動詞や名詞の語形変化形の数も含まれる。一方、共起表現の出現頻度には、語形変化形の数に含まれない。つまり、knowの数にはknown, know, knowing, knew, knowsが含まれるが、known toの数にはknow toの数に含まれない。

- ① 収録したすべての見出し語の単語分類リストが13ページ以降にあるので、まずはここを探して使いたい単語のある項目を見つけよう。
- ② 次に、7ページの図に示すような該当する分類項目を調べて単語の使い方を理解し、適した単語を選択する。
- ③ 本文中のそれぞれの分類項目を参照する際には、その分類の前後にも近い意味の単語がある場合が多いので、近くの項目も合わせて調べてみるとよい。
- ④ 巻末にはアルファベット順および50音順の索引があるので、そこからも見出し語および類語を見つけることができる。

本書には、論文でよく使われる高頻出単語の多くを集めてあるが、それでも自分のイメージどおりの言葉が見つからないこともあるかもしれない。そのような場合であっても、本書に示した単語を使って何とか自分の意図を表現できないか工夫してみることが大切である。

本書へのご意見ご感想は、ruigo@lsd.pharm.kyoto-u.ac.jp までお寄せください。

(河本 健)